

# 馬興国先生を追悼する一文——「戦友」に贈る言葉

孫 安 石（外国語学部）

馬興国先生と初めてお会いしたのはいつなのかは正確に覚えていないが、二〇一一年一月に神奈川大学で開催された「辛亥革命一〇〇周年記念シンポジウム—辛亥革命とアジア」を準備する時に、馬先生と一緒に裏方の仕事を担当しながら、かなりの時間を共有したことを覚えている。日本は勿論、中国、台湾、韓国の辛亥革命研究者を一堂に集める大がかりな会議だったので、招聘状の準備、各種通訳の手配などの大会運営を始め、会議が終わった後の論文集刊行に至るまで日本、中国、台湾の研究者らと、頻繁に連絡を取る必要があり、馬先生と過ごす時間が自然と長くなったのである。いま思えば、辛亥革命記念シンポジウムの時の馬先生は正に縁の下の力持ち、とも言うべき存在で、重要な役割を果たしたことが分かる。

その後、私は、中国語学科の業務と本来の研究に戻ったこともあり、しばらく馬先生と密に接することはなかったものの、折に触れ学内の研究所や学会などの関係で会うことがあり、馬先生と神奈川大学の国際交流について意見交換する機会を断続的に持ったことを覚えている。その後、二〇一四年には中国語学科に在籍している学生を中国に派遣する際に、学生の国籍問題で協定校が受け入れに難色を示した案件をめぐって馬先生に解決を

お願いし、翌年の二〇一五年には馬先生の按配によって、私も本格的な大連訪問を実現することができた。今までひたすら上海の都市研究に従事していた私が大連の重要性を知ったのも、馬先生のおかげと言えなくもない。

二〇一五年末から大学の新たな体制が始まり、私も神奈川大学の国際交流に関連する業務の一端を担当することになり、馬先生の研究室を訪れては、当時の中国国内の大学の状況を伺うことができた。当時、私は上海の都市研究に取り組んでいたことから東アジアの開港都市に位置する「海とみなと」にある大学と連携することについて相談したが、馬先生は開口一番、「大連と広州の大学ではそれぞれ知り合いや後輩が活躍中なので紹介しましょう」と賛意と協力を示してくださった。机上の空論よりはまず行動を、ということで、その後、私は馬先生とチームを組んで大連、上海、広州の大学を回ることになった。

この出張の際に、馬先生はご自身の人生経験をたくさん語ってくださいました。若い時に文化大革命を経験したことで勉強が遅れたこと、周恩来総理と太平正芳首相との間の約束が実現した太平学校で日本語を学んだこと、遼寧大学副学長を務めたほか、九州国際大学に在職していた時の留学生募集に関わった経験など、話題が絶えることはなかった。私も家族や娘のことを話題にしたり、外国人として日本で生活する大変さについて愚痴をこぼしたりしながら、馬先生を人生の良き相談相手として頼っていたふしがある。その後も断続的に中国出張は続いたが、馬先生からのメールやWechatには今までにない「戦友」という単語がたびたび入るようになった。私としては、先輩である馬先生から「戦友」と呼ばれるのは、望外の喜びであり、勲章のようなものでもあり、些か誇らしくもあった。

今年の五月に日本では認可されていない治療法を試しに、瀋陽に帰国したい、ということを持ち明かされた時

には少し戸惑いもあったが、横浜で再会できることを信じていた。お亡くなりになる二週間前までもしつかりと連絡がとれており、一〇月に開催される東アジアの高等教育を取り上げたシンポジウムについても助言をいただいていたことから考えれば、馬先生のご逝去はあまりにも突然のことであった。もし叶うのであれば、もう一回、「戦友」の馬先生と再会することを切に願う。勿論、砲弾が飛び交う戦場ではなく、日・中・韓の若者の笑顔があふれる大学のキャンパスで肩を並べてゆつくりと散策を楽しみたい。